



伝統の技でつくる
日本のお石塔。



[製造元]

坂口石材工芸

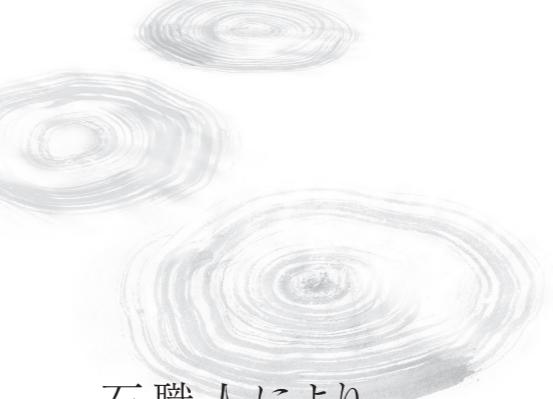
<http://www.sakaguchi-sekizai.co.jp/>



百年の時を経て
深まるあじわい。

石職人により
吹き込まれた魂が
永い年月を経て、
その土地に添い、
心に添う。

数百年という永い年月を経て、
静かにたたずむ中世に建てられたお石塔。
その光景からは、日本特有の“美”と“侘び寂び”的世界が漂います。
中世の石塔に代表される型には、五輪塔をはじめ、宝塔、宝篋印塔、無縫塔と
呼ばれるものがあります。いずれの型も日本の中世を象徴するモデルであり、
現代主流となっているデザイン墓石とは一風異なる情緒を魅せてくれます。
仕上げの技法においても、当時は現代のような研磨機械が存在しないため、
「ビシャン」、「ノミ切り」、「小叩き」という古くから伝わる仕上げ技法が用いられ、
石本来の魅力を最大限に引き出しています。



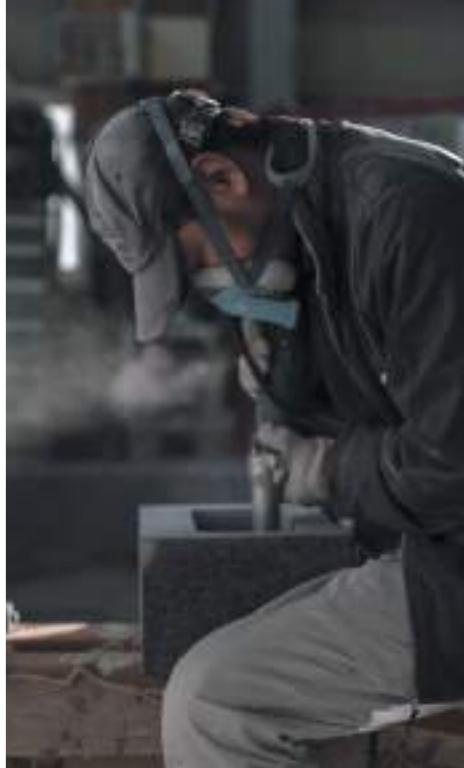


繊細な技を生む。
道具へのこだわりが



使い込むほど
その手に馴染み、
使い手と一体化する。

情緒あふれるお石塔を生み出す秘密は、
職人の技に加え、使用する「道具」にあります。
例えば、セットウは石との接触部分に微妙な「焼き」を入れますが、
「焼き」を入れることで硬度が増し、ノミもコヤスケもより効力を向上させ、
職人が理想とする「削り」を実現させます。
過剰な「焼き」は、割れやすくなり、道具の寿命を縮めるため、
経験に基づく適度な加減が要求されます。
ノミは通常「荒ハズリ」、「中ハズリ」、「仕上げノミ」とよばれる3本を使用します。
個々の職人にマッチするものを選択し、
「太さ」や「長さ」などにおいても特注品を使用します。
さらに、ノミの頭に焼きを入れることで適度な硬度調整も必要とされます。
両刃とは、小叩き仕上げに使用するもので、
幅4~5cmのカミソリの刃のように砥いだ刃が両端に付いた道具です。
こまめに刃先を砥ぎ、叩きの目が均一に深く刻めるようにします。





熟練の技により
生み出される
石の美。

古より伝わる技を受け継ぎ、
手仕事にこだわる。

石の表面に細かな凹凸をつける技法「ビシャン仕上げ」は、
石が持つ本来の趣を表現できます。そして、それをさらに
洗練されたものにする技法が「小叩き仕上げ」です。
ビシャンで仕上げた後、両刃という道具を使い、
美しい線状のタタキ目をつけるこの小叩き仕上げは、
熟練した石工でなければ難しいといわれ、この技法を習得し、
美しい完成品を生み出せることが「匠の証」なのです。
その技法の魅力を最も引き出すお石塔のひとつが「五輪塔」です。
五輪塔は地・水・火・風・空の五大を表したお石塔ですが、曲線も多く、
垂直かつ均等に叩くため、非常に難易度が高いといわれています。
磨き仕上げと比較しても、より石の表面は白さを増し、
白御影石の場合はより「白の美」が強調されます。
機械化がどれほど進み、精度が向上したとしても、
長年の経験と確かな腕を持つ石工職人の手仕事を凌駕することは難しいでしょう。



■ 小叩き仕上げとは

鉄に焼を入れ、両側をカミソリの刃のように研いだ「両刃」という専門の道具を使い、細かな線を石に刻む仕上げです。熟練した職人がひと目ひと目を丁寧に刻んでいく根気と集中力を要する仕上げであり、小叩きをする前に、丁寧に丁寧にビシャンかけをして下地を作り、この下地でのきばいが小叩きの完成度を左右します。



■ ノミ切り仕上げとは

古くから、お石塔、灯籠などの石の表面の仕上げに用いられています。熟練した職人でも味わいのあるノミ切り仕上げは難しいと言われ、加工職人の誰もができるものではありません。ノミ一本とセットウだけを使用して仕上げていくノミ切り仕上げにおいて、職人はノミ一本の太さや長さにこだわり、セットウの重さ、握りの柄の形、太さにもこだわります。そこまで身体に馴染んだ道具でないと自分の理想とするノミ切り仕上がりにならないとこだわり続けるのです。

JAPANESE BRAND

中世の石塔 | シリーズ紹介

熟練の技をもつ職人が、伝統の技を結集して生み出す石塔の数々。

そのひとつひとつは、職人の魂が吹き込まれ、深い味わいのある美しさが感じられます。

長い時を経て、さらに美しく変化し、人々の心に寄り添います。



— 淨光明寺五輪塔 —



— 忍性五輪塔小叩き —



— 叡尊五輪塔 —



— 忍性五輪塔ノミ切り —



— 宝満山五輪塔 —

JAPANESE BRAND

中世の石塔 | シリーズ紹介

西香院宝篋印塔



東照宮宝塔



泉涌寺無縫塔

